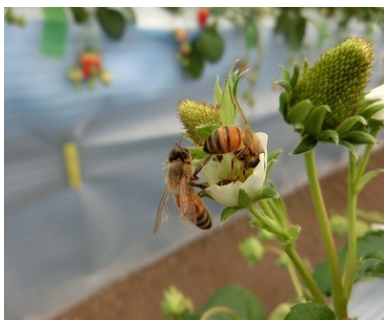


コラム 36：ミツバチの戦い

(2014. 11. 5)

それは私が大好きな風景でした。9月の初め、おだやかに晴れ渡った秋の空の下、軒下の台に載せたダンボールの巣箱から、ミツバチが元気に飛び立っていきます。小さな入り口から一匹、また一匹と、まるで小さな戦闘機のように、見事に舞い上がっていきます。入れ替わるように、仕事を終えたミツバチが、入り口の前の小さなスペースに、ゆっくりと戻ってきます。その穏やかで平和な日常風景は、これからもずっと続いてくれる「生命のいとなみ」のように、その時の私には思われました。



このミツバチたちは、昨年(2013)の11月に私の所にやってきました(コラム 30:ミツバチの話 参照)。それから約7か月、小さなハウスの中で、イチゴ栽培の助っ人として活躍し、生活をともにしてきました。彼らの勤勉な働きのおかげで、昨年の3倍にまで、生産量を伸ばすことが出来ました。夏に近づく頃になると、イチゴの花も少なくなり、ハウス内は高温になって、彼らにとって快適な住まいとは言えなくなってしまいます。それゆえ、ほとんどのミツバチはハウスの外に引っ越して、いつのまにか巣箱から居なくなってしまうそうです。

ところが、「うちのミツバチさん」だけは違ったのです

なぜか、律儀にも(?)ハウス内の巣箱に大量に居ついてしまいました。それで私は6月の初めに、巣箱をハウスから自宅の東側の軒下に移動しました。ろくに花も咲いていない所に閉じ込めておくのは、不憫に思われたからです。今一つの理由は、彼らが頑張ってくれれば、今年の秋に注文しなくてもいいかもしれない、という打算もありました。それから3か月、ハウスの外の世界での「食料自給」の問題や、台風の影響や豪雨などの、幾多の困難を見事に乗り越えて、彼らは見事に生き残ってくれました。冬場にハウス内にいる時よりも、力強く飛び回り、巣箱の中のミツバチはドンドンと増えていったのです。

9月4日秋晴れの昼下がり、巣箱の近くで花壇の草取りをしていた私は、彼らの奇妙な動きに気づきました。巣箱の入り口に、まるで入り込むのを塞ぐかのように、ミツバチが沢山群がっているのです。今まで見たことのない姿です。「一体何のために？」私には彼らの行動の意味が全く理解できませんでした。すぐに、これは彼らの「過酷な戦い」の開始のシグナルだったとわかりました。まもなく、一匹の大きなハチが、巣箱の側を覗くように飛んでいるのを目にしたのです。攻撃の手段を持たない彼らには、「大勢で巣箱を守る」という方法しか戦いようがないのです。



9月21日午後4時頃、今度は3匹で襲来しています。この時期になると、たびたびコイツらは飛来し、明らかな攻撃を仕掛けてきます。この時点では、ミツバチたちの巣箱の「防衛作戦」は成功しているようでした。しかし、「敵」の攻撃は頻繁になり、日ごとに激しくなりました。入り口を固めているミツバチを一匹ずつ噛み殺し、口に咥えて飛んで地上に放り出しています。ただ懸命に守っているだけで、攻撃する術を知らないミツバチは、遠からず全滅してしまうに違いないと思いました。

「早く来て！早く！」庭の方から妻の叫び声。慌てて行くと、大きな虫とり網を持って地面を押さえています！「踏んで！踏んで！」一瞬何のことか、と思いました。私は慌てて、妻が網で押さえている「悪党ハチ」を踏み付け、靴を振るようになって潰しました。動かなくなったのを確認すると、妻が満足気につぶやきます。「ミツバチをいじめたら、私が許さないからね」・・・敵の怖さを知らない妻の「蛮勇」に引っ張られて、憶病な私も仕方なく「参戦」。「婦唱夫随」(?)というわけで、ここから二人で網を持っての「ミツバチ支援」が始まりました。

打ち合わせるまでもなく、やり方は決まっていました。ミツバチが飛んでいない状態で、「悪漢」が巣箱の前の空中で動きを止めた時—その瞬間がチャンスです。妻がすばやく大網を横に振って捕え、地面に被せる。すかさず私がその上から小網で押さえ、同時に足でヤツを踏み潰す。今から思うとゾッとしますが、私たちはこんな危険なことを、何にも防御を身に着けないでやっていました。「乳がん」の手術をしたばかりのオバサンと、「ひざ痛」に悩むオッサンが、大きな網を振り回してハチと戦っている姿は、はた目には滑稽な姿かもしれませんが、私たちは必死でした。連日の「ミツバチ支援」の戦いで、私たちの殺した「悪党ハチ」は、数十匹に達したと思います。この時点でまだ、私は「巨大なハチ」の正体を知りませんでした。



ここまで来てやっと、私はコイツについて調べる気になり、踏み殺した死体をパソコンの前に何匹か置いて、ネット検索をしました。嫌な予感が的中しました。まぎれもなく「スズメバチ」です。それも一番大型で凶暴な、体長4センチもある「オオスズメバチ」。「人間にとって最も危険な生き物」「年間に死亡者多数」「見かけたら静かにその場を離れるように」と注意書きがあります。死骸の中には「キイロスズメバチ」もあり、複数の「種類の「敵」が襲っていたこともわかりました。

私たちは一人だけの時も、それぞれ勝手にやって、「今日は3匹やっつけたよ」などと、「戦果」を、能天気にも自慢し合っていました。それにしても、殺されたミツバチを側に置くと、体長で3倍、全体の大きさでは5倍以上はあるようです。ライオンに子犬が向っていくような力量の差で、勝負にならないことは明らかでした。

9月27日、午前9時、私の庭に信じられない風景が生じました。家の庭一杯に、空が黒くなるほど、ミツバチが飛び交っているのです。その数はおそらく数千匹、もしかしたらそれ以上です。私は今だかつて、これほどのハチの大群の乱舞を見たことがありません。私たちは何が起こったのかわからず、二人で呆然と見上げていました。その不思議な光景は、間もなくおさまりました。一体何処へ？その答えはすぐにわかりました。庭の中央にある約5mのヤマモミジの中ほどに、異様なものを発見したのです。50cm位の長さの大きな帯が幹に巻き付いています。まじかに近づいてみると、そこには無数のミツバチが塊になって、びっしりと幹に張り付いています！



いつまでも見ているわけにもいかず、仕事のためにその場を離れ、少し時間をおいて覗いてみると、そこには何もありません。静かに秋の風が吹いて、モミジの葉が揺れています。もしやと思い、木の根元の辺りを探してみても、ハチの死骸などは全く発見できなかったのです。さっきのは夢の中の出来事？それとも幻覚？あの凄まじい数のミツバチの大群は何処に行ったのか？私には理解不能の出来事でした。

以下は、後で本などを調べた知識をもとにした、私の勝手な推測です。あれはミツバチの「乱舞」などではなく、彼らの「総力戦」ではなかったのか、と考えたのです。その時には余りの数の大群ゆえに気づかなかったのですが、沢山のミツバチに混じって、スズメバチもいた筈です。そしてモミジの幹に張り付いた「ミツバチの帯」は、スズメバチを「窒息死」あるいは「熱死」させるための、彼らの「究極の技」、すなわち「捨て身の攻撃」ではなかったのか、と想像したのです。

その後に、巣箱の状況に変化がおきました。まず、スズメバチが来なくなりました。そして巣箱の入り口を守る「警備担当」のミツバチが少数になりました。そして何より不思議なのは、蓋を開けて中を覗いてみると、住んでいる数が明らかに減少しているのです。彼らはスズメバチとの戦いに勝利したのではなかったのか？あのすさまじいほどの大群は何処へ行ったのか？もしかしたら、この巣箱の安全性に問題を感じて、女王蜂ごと大半は移動してしまったのか？高度な社会生活を営むミツバチの行動は、私の想像力の及ばない世界のようにです。

10月4日朝の9時過ぎ、一旦おさまっていたスズメバチの攻撃が再び始まりました。今度は必ず3匹以上、時に5匹にもなりました。警備の手薄なミツバチは、「凶暴な侵略者」により、ほとんど抵抗するすべもなく、一方的に殺されていました。片端から噛み砕かれ、頭部と胴体をバラバラにされて、凄惨な状況となりました。それにもかかわらず、今回は私たちも援護することができませんでした。なぜなら、奴らは必ず3匹以上で来て、私たちが近くに行くと、うちの1匹が前に立ちふさがるように飛来し、「やるのか？」とでもいうように威嚇してくるのです。何度も殺されたことで彼らも「学習」したに違いありません。一度に全部を捕獲することは困難ですし、失敗すれば、攻撃の矛先はこちらに向いてくるのは明らかで、非常に危険でした。やがて、奴らは巣箱の中に自由に入り込み、「敗残兵」のごとく無抵抗になったミツバチを、片端から殺してゆきました。私はこの状況を見て、この巣箱はスズメバチに完全に占拠された、と確信しました。



10月10日の夕刻、私はかねて考えていたことを、実行することにしました。あたりが薄暗くなるのを待ち、雨合羽、長靴、防護メガネで「完全武装」し、ハチ用のスプレー「マグナムバズーカ」3本と大型虫捕り網を持って巣箱に向かいます。奴らは入り口付近で、時折頭を出入りさせています。中に間違いなく、かなりの数がいるようです。左手でゆっくりと網を巣箱にかけると、右手でスプレーを握み、巣箱の入り口辺りにジェット噴射！飛び出してきたヤツらに2本目を直接噴射！もう出て来ないのを確認してから、ゆっくりと巣箱の上蓋を上げ、その中に3本目を全部噴射！

・・・少し間をおいて、何も起こらないことを確認し、私は巣箱をそっと抱えて、ハウスの側の焼却場に持って行きました。用意しておいた枯葉の上に箱を置き、新聞紙を下に敷いて、点火します。油分があるのか青い焰を放っています。巣箱は意外に燃えにくく、何度も乾いた枯れ枝を下に押し込みました。完全に燃え尽きるまでに、30分位は要したと思います。翌朝、巣箱を置いていたプラケースを見ると、水の中に累々と多数のミツバチの死骸が残されており、そのなかには大きなスズメバチも混じっていました。・・・それが彼らの戦いの「最後の風景」でした。



以上が、今年の9月から10月の初めにかけて、私が見たミツバチとスズメバチの戦いの顛末です。デジカメで彼らの行動を撮るうちに、彼らの戦いに「参加」することになり、図らずも凄まじい戦いの「修羅場」を見ることになりました。後に調べて分かったことですが、スズメバチ-は夏の終わりと秋にかけて、自分たちの幼虫の餌を得るために、ミツバチの巣を襲うそうです。それゆえ養蜂家は、それを防御するための道具を、いろいろ使用して対策をするようです。私がそのことを知ったのは、すべてが終わった後でした。

ミツバチは自らの巣を守るために全力で戦い、結果的には巣を明け渡して何処かに移動し、双方ともに沢山の犠牲を出しました。私と妻は、半年以上もハウスの中で働いてくれたミツバチがカワイイあまりに、スズメバチと戦うことになったのです。この行為が正しかったかどうかは、私にはわかりません。自然界の中で循環している「食物連鎖」の生態系を、少し乱しただけなのかもしれません。私が最終的に焼却処分したのは、自分の家の軒下にスズメバチが出入りする巣箱があることは、非常に危険であると考え、「自衛」のためにやりました。それにしても、か弱いミツバチの沢山の死骸を見ると、「専守防衛」というのは、かくも残酷で厳しいものなのか、とつくづく思うのです。



「ワシはミツバチがやられとるのを、見ておれんかっただけなんじゃんじゃが、こがいな危ないことは、もう2度とやりどうないのう。来年は、終わったら業者に返送することにするわい」